



Title	中世和歌における古歌再利用意識の展開とその芸術学的射程
Author(s)	土田, 耕督
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/24948
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【18】

氏 名	つちだ こう すけ 土 田 耕 督
博士の専攻分野の名称	博 士（文学）
学 位 記 番 号	第 2 6 0 6 1 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 25 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	中世和歌における古歌再利用意識の展開とその芸術学的射程
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 上 倉 庸 敬 (副査) 教 授 藤 田 治 彦 准教授 三 宅 祥 雄 准教授 田 中 均 教 授 加 藤 洋 介

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、今日「本歌取」と呼ばれる方法と、その基盤となる詠歌意識と理念の史的展開を、中世和歌世界のなかに跡づける試みである。目指すところは、中世和歌における〈過去〉の再利用が見せる諸様相に明確な姿を与え、その表現論的意義を解明すること。そうした上で、さらに、現代の研究においてしばしば衰退の一途を辿ったと認識される、新古今時代以降の和歌を新たに価値づける解釈上の基盤を提起することも目指している。A4 判、目次 2 頁、本文 88 頁（二段組で 1 頁上下各 28 行・1 行 45 字、本文は 400 字詰原稿用紙に換算して、およそ 400 枚）から成る。

本論文の「中世」とは、12 世紀末より 13 世紀初頭にかけての「新古今時代」から、南北朝期、14 世紀末までを指す。この範囲は、いわゆる「本歌取」を完成させたと現代いわれている、藤原定家（1162—1241）が活躍した時代と、定家を「本歌取」の祖とし、それに最高の価値を与える現代の認識の淵源があると、申請者が考える時代とによって囲まれている。

第一章では、わけても定家の言説を分析して、「本歌取」が先鋭化された新古今時代における用語の規定を確認し、それが今日の用語法とは異なる内実を持つことを論じている。「本歌を取る」という語とともに中世和歌世界において一般的であった「古歌を取る」という用語の内実もも考察し、それが「本歌を取る」方法と並置され、古歌再利用法の総体を補完するものであったことを明らかにした。その結果、古歌再利用法を古歌の主題としての「心」を踏襲してい

るかどうかによって「本歌取」「古歌取」に分類するという、先行研究にはなかった分類基準を提起、さらに、複数の古歌からの詞の拟取や歌詞の同時代的共有という要素が絡み合う、新古今時代の古歌再利用法の複雑な様相を考究している。

第二章では、新古今時代の多様な古歌再利用法のうち特に「古歌取」を採用し、そこに独自の価値づけを施した歌人として、定家の息子である藤原為家（1198—1275）を取りあげ、その古歌再利用意識を前時代からの展開と位置づける。為家が歌論書『詠歌一体』において設定した「古歌をとる事」に挙げる例歌を素材に、「古歌取」の表現論的特質を考察、併せてその実践を見て、新古今時代の古歌再利用意識を推し進めた方法論の内実を導き出した。

第三章では、為家の次世代にあたる歌人たちによる古歌再利用法の解釈を分析、それが次第に入り組んで行く状況を論じる。この時期、「古歌取」的方法を「本歌を取る」と呼ぶという、用語の錯綜と同時に、阿仏（生年不詳、1283 没）や京極為兼（1254—1332）によって、詠歌行為における古歌の再利用そのものに対する疑義とも捉えうる表現意識があらわれた。しかしそれは二条為世（1250—1338）を中心とした歌壇の勢力によって否定される。こうして中世和歌が、古歌を再利用するという表現意識から離れては決して成り立ちえなくなる、その傾末を明らかにした。

第四章では、錯綜する古歌再利用意識がある到達点へと向かって収斂していく様相を見つめる。素材は、二条為世門下の歌僧、頼阿（1289—1372）の歌論書『井蛙抄』である。そこでは頼阿の価値判断によって種々の古歌再利用詠が分類されるが、頼阿自身の詠歌理念は定家に共鳴しており、それで定家の古歌再利用詠が特別視される。そうした頼阿の分類は恣意的なものであり、定家特別視は再考されねばならぬと論じる。

第五章は、中世和歌における古歌再利用意識の到達点として、頼阿と二条良基（1320—88）が共同で執筆した歌論書『愚問賢注』と良基の歌論書『近來風体』が、それぞれに載せる古歌再利用法分類を考察する。『愚問賢注』の古歌再利用法の分類項目は『井蛙抄』を継承し、整理・発展させたものなので、定家の古歌再利用詠がさまざまな「本歌取」中、最高と価値づけられる。「定家的本歌取」が至高の「本歌取」であるという認識が確立し、それが現代にまで繋がっている。他方、良基の詠歌理念は為家のそれに共鳴、頼阿とは違った古歌再利用法の分類意識をもつ。もっとも高く評価されるのは「古歌取」的方法である。頼阿と良基それぞれが「本歌取」と「古歌取」を代表、それが中世和歌における古歌再利用意識の到達状況である。

中世和歌における古歌再利用意識の展開を以上のように跡づければ、蓄積された過去の和歌は詠歌のための素材検索用（データベース）と見なしうる。それへアクセスする方法の違いが、古歌再利用に関するそれぞれの方法論を生んでいる。「本歌取」が検索するデータベースが静的な構造を持つのに対し、「古歌取」が検索するそれは不断に拡張される動的な構造を持つ。そのとき詠歌という表現は、データベースの自律性に基づく〈新しさ〉をおのずから達成する。古歌再利用意識の芸術学的射程は、新古今時代以降の和歌世界が獲得することになった、それまでのような、作者による創造といった契機を内包する基準とは違った、別の価値基準の発見を指摘できるところにまで及ぶのである。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

「本歌取」に関する従来の研究の問題点を解決するための素材は周到に選ばれており、素材となる歌論と実践に対する分析は説得力に富む。それによって、中世和歌の基盤となっている古歌再利用意識の実相を芸術史的〈展開〉というかたちで新たに提示して見せた切り口は、高く評価できよう。「本歌取」という、こんなに無批判に用いられる概念の曖昧さを指摘し、それを定家の言説に即して帰納的に措定、同時に、今まで看過されてきた「古歌取」の方法論を為家の言説と実践に見出して価値づけたことは、芸術学以外の領域にも寄与するであろう。「古歌取り」の表現論的価値が、「本歌取」と並立するというよりも、むしろそれを超克するものであるという論理と見解は論者の独壇場である。

「古きをこひねがふ」という理念のもと、主題として古歌の「心」を踏襲することを前提とする「本歌取」は、古歌に関する十全な理解と解釈を要求するため、詠歌に臨むすべての歌人に可能な方法ではない。古歌の詞のみを模取して再構成する「古歌取」は、「本歌取」ほどの趣味学識がなくても、志向すべき古歌の様態を達成できる方法である。新

古今時代を頂点に、芸術的完成度という観点からは中世和歌が衰退の一途をたどったと従来、考えられてきたのはそのためであった。しかし本論文が明らかにしたように、「古歌取」は、まさに詠歌の集団性ともいうべき要素を持ち、〈データベース〉の自律性に従っておのずから更新される歌詞のネットワークを形成する。それは、芸術営為一般において〈過去〉がいかに共有され介在するかという、普遍的問題と通底する。本論文は、中世和歌からこの問題に対する一つの解答を導き出し、芸術学研究のなかでも独自の論理を展開しているといえる。

本論文の問題点も少なくはない。古語学的知見が足りないので、和歌や歌論書の分析に精確さを欠く箇所が散見される。ことに「本歌取」の淵源を定家に求めながら、定家の言説に「本歌を取る」という言葉を見出せなかったことは、論理を揺るがしかねない危うさを孕んでいる。芸術学的な射程を測った結論も、他ジャンルに適用する際の条件が明示されていないことは、妥当性に不安を抱かせる。過去の再利用という行為が中世和歌に限定されて考察される点もどうであろうか。たとえば万葉歌成立という、創造の原初においても、過去再利用が既にプログラミングされていることを見逃してはなるまい。こうした不満はしかし、国文学研究の分野で論者が大いに成長すれば、解消されるに違いないことでもある。

芸術学における学位請求論文として、過去にない研究成果を示した本論文は、芸術学と国文学を横断する領域を新たに切り拓く可能性を秘めている。博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。